撮影：アトレ恵比寿 西館 8階 シロノニワ

「アトレ サステナビリティアワード2024」において、栄えある賞を受賞した各店の代表者4名と、代表取締役社長 髙橋弘行による座談会を開催いたしました。本セッションでは、サステナビリティ推進における各取り組みの成功要因や地域社会との連携、活動を通じて得られた意識の変化、そしてアトレが目指す今後のビジョンについて、多岐にわたる意見が交わされました。

atré Sustainability Award 2024 winner

［グランプリ］
プレイアトレ土浦
福岡 丞

［社会部門賞］
アトレ取手
澤村 佳絵

［環境部門賞］
アトレ恵比寿
小暮 健人

［人部門賞］
アトレ竹芝
後藤 淳生

dialogue

アトレの未来を拓く サステナビリティと地域共創の可能性

facilitator

株式会社アトレ
代表取締役社長
髙橋 弘行

1967年生まれ。90年に東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）に入社。総務や経営企画、営業の各部門を経て、東京支社営業部長、本社営業部次長を歴任し、2017年に株式会社びゅうトラベルサービス代表取締役社長就任。19年にJR東日本執行役員営業部長、21年にJR東日本常務執行役員を経て、23年6月から現職。

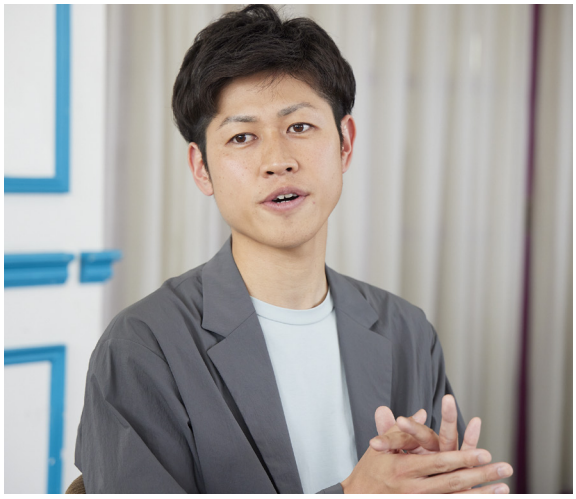
サステナビリティ活動から生まれる価値と成果

はじめに —— 受賞した取り組みへの期待と問いかけ

社長：本日は、「アトレ サステナビリティアワード2024」を受賞された皆様にお集まりいただきました。皆様の先進的な取り組みは、アトレが持続可能な社会の実現に向けて歩むべき未来を照らす、大変意義深いものです。それぞれの活動には、多くの共通項や、アトレ全体のサステナビリティ推進における重要な示唆が含まれていると感じています。まずは、各取り組みの経緯や具体的な成果、そしてその過程で直面された課題や苦労についてお聞きします。

福岡：プレイアトレ土浦が取り組む「いばらきK1ライド」は、2022年の「茨城デスティネーションキャンペーン（DC）」を契機として発足した、地域を代表する大規模サイクリングイベントです。当時、土浦市は「自転車のまち」としてのブランディングを推進していましたが、それを象徴するような代表的なイベントが存在しないという課題認識がありました。そこで、ナショナルサイクルルート「つくば霞ヶ浦りんりんロード」沿線に立地する14の市町村に対し、地域が一丸となったイベントを創出することの重要性を丁寧に説明し、ご理解とご協力を賜るところから着手しました。単なるサイクリングイベントに留めるのではなく、参加者が休憩するエイドステーションにおいて14市町村の特産品を提供し、当イベントへの参加を通じて茨城県産の食の魅力を一度に堪能できるといった独自性を付加することで、地域の観光プロモーションの場としての機能も強化しています。

澤村：アトレ取手では、4階の文化交流広場「たいけん美じゅつ場 VIVA」の活動開始から約5年を迎えました。取手市、東京藝術大学、東日本旅客鉄道株式会社、そしてアトレの四者が連携し、現代社会の様々な課題や将来展望などについて、行政と市民が共に議論を深める対話型フォーラム



「VIVAフォーラム」を毎年開催しています。VIVAは年間約36万人の皆様にご利用いただいており、そのうち約3割を高校生をはじめとする若年層の方々が占めています。本年は「『正解がない時代』の『生きる力』を育む学びとは～若者の居場所としての駅ビル～」をテーマに掲げ、多くの若者が集うVIVAの潜在的な可能性について、中村取手市長や東京藝術大学の日比野学長、教授陣、髙橋社長にもご登壇いただき、建設的なディスカッションを行いました。

小暮：アトレ恵比寿が取り組んだ「エシカル消費を意識した、つづく・つながる館内装飾」は、販売促進業務を担当する中で、館内を彩った後に廃棄されてしまう季節ごとの花々や装飾物の再利用について、かねてより課題意識を抱いていたことが発端です。そのような折、2023年に開催された「渋谷イノベーションウィーク」におけるパネルディスカッションの一つ、「エシカル協議会」に登壇する機会を賜りました。そこで「花のロスを減らし、花のある生活を文化にする」という崇高なミッションを掲げ、ロスフラワー®を活用した事業を展開されている企業様と出会い、その理念に深く共感しました。この出会いを契機とし、通常であれば廃棄されるか、あるいは市場に出回ることのない花々をドライフラワーとして

再生させ、アトレ恵比寿のショーウィンドウやエントランス周りの装飾として再活用する取り組みを実践しました。さらに、これらのドライフラワーをミニブーケに仕立て、母の日にお客様へプレゼントするイベントも開催し、お客様やショップスタッフの皆様からも、この取り組みの意義について温かい共感のお言葉を多数頂戴しました。特筆すべきは、この活動が地域の小学校の先生の目に留まり、恵比寿にある小学校においてエシカル消費をテーマとした授業を実施する機会へと発展したことです。その後、児童たちがエシカルについて主体的に学習した内容を発表する「テーマプロジェクト発表会」にも参加させていただきました。

後藤：アトレ竹芝の「伊豆・小笠原諸島との連携企画」は、2022年より構想を練りはじめ、まず竹芝という立地にあるアトレだからこそ実現可能な取り組みとは何かを模索することから着手しました。竹芝は、伊豆・小笠原諸島と本土とを結ぶ重要な玄関口としての役割を担っています。手つかずの雄大な自然が残り、伝統的な行事や独自の文化など、魅力にあふれる伊豆・小笠原諸島の素晴らしさをより多くの方々に認知していただくことが、地域の活性化、ひいてはエリア全体の価値向上につながるものと考えました。そこで、各島の観光協会様へ直接ご連絡を取り、関係性を構築することからはじめ、2023年度には「島を味わうFood Fest」と題したレストランフェアの開催に至りました。各観光協会様より食材の取り扱い先を複数ご紹介いただき、レストランにて島の食材をふんだんに用いたオリジナルメニューを提供するとともに、島の自然や文化を紹介するパネル展示なども実施しました。お客様や各島の関係者の皆様からは大変ご好評をいただき、参加されたショップの方々からは「予想を上回るメニューの販売実績があり、レギュラーメニューとしての採用も検討したい」という、大変前向きなお声も頂戴しています。

社長：皆様にお伺いしたいのですが、それぞれの取り組みを推進していく上で、成功へと導くために特に意識された点はどのようなことでしょうか。

福岡：私どもの取り組みが成功した要因としては、単年度のイベントとして捉えるのではなく、5年後、10年後といった将来を見据えた長期的な視点で計画を策定したこと、そして地域の関係者の皆様を積極的に巻き込んでいくという点に、特に意識して取り組んだ結果であると考えています。当初より、プレイアトレ土浦が地域のハブとなり、我々がエリア全体を牽引していくという強い意志を持って臨んだこともあり、地域の皆様から様々な情報を得て、強固な関係性を構築することができました。これが、アウトプットの段階で非常に効果的に機能したと分析しています。はじめはプレイアトレ土浦の営業部3名という限られた人数でゼロから立ち上げましたが、イベントを単に実施するだけでなく、その後の文化醸成までを視野に入れていましたので、継続的な働きかけが必要な部分においては、人的リソースも時間も要し、大変な労力を伴いました。

小暮：アトレ恵比寿の取り組みにおいては、多くの皆様の心を和ませ、温かい気持ちにさせる「花」という素材を採用し、館内装飾として活用したことが、成功の大きな要因になったと認識しています。リサイクルやアップサイクルといった、資源を循環させていくことに対する社会的な意識が、昨今ますます高まっていると感じています。しかしながら、再生

することを優先するあまり、再生されたものが必ずしも良質なものではなかったり、かえって不要なものを生み出してしまったりする事例も一部にはあるのではないでしょうか。そのような状況下において、花を扱う生花店様、装飾を施すアトレ、そして何よりもお客様に笑顔になっていただける花を活用したこの取り組みには、様々な可能性を感じました。先ほども触れましたが、2023年11月の「渋谷イノベーションウィーク2023」での経験を機に、サステナビリティに関わる活動について真剣に考えるようになり、ロスフラワー®に取り組む企業様との出会いから2024年1月の施策実施まで、2ヶ月に満たない期間で実現に至りました。このスピード感で実現できたのは、携わってくださった皆様の共感の深さがあったからこそだと確信しています。

後藤：アトレ竹芝の場合、各島の観光協会様と直接コミュニケーションを取らせていただくことで、島が本当に伝えたい魅力やPRしたいポイントを的確に汲み取ることができ、取り扱う食材についても様々な角度から協議を重ねて進めることができました。私たちが想像していなかった、例えばウツボなどの食材をご提案された際には正直驚きましたが、ショップの方々も非常に協力的かつ積極的に取り組んでくださり、ウツボをフリットにしたメニューを開発してくれました。また、三宅島の明日葉をチャーハンに仕立てたメニューも、島の方々にとっては斬新な発想であったようで、新たな発見を通じて、島の魅力と食の魅力の双方を巧みに掛け合わせることができた点が、成功の要因であったと分析しています。

THEME 01

地域連携によって生まれる相乗効果

地域連携の核心と、意識変革の触媒としての役割

社長：皆様のお話から、取り組みを成功に導くためには、地域との連携がいかに重要であるか、そして周囲を巻き込みながらサステナビリティへの意識を醸成していくことの必要性を改めて感じます。皆様が地域連携において特に大切にされていることや、活動を通じて周囲の意識にどのような変化が見られたか、具体的なエピソードを交えてお聞きかせいただけますか。

澤村：アトレ取手では、VIVAで活動するアート・コミュニケータの皆様を「トリばァ」と親しみを込めてお呼びしており、VIVAの活動にとって不可欠な存在となっています。「トリばァ」が小学校などで授業を行い、児童たちとコミュニケーションをとり、その後VIVAに集まって対話型鑑賞を実践するという一連のプログラムは、VIVAの代表的な活動の一つとして定着

しています。このような教育機関との連携、そしてアート・コミュニケータが伴走者となる対話型鑑賞プログラムは、地域との連携強化にも大きく貢献しており、「トリばァ」の数も年々増加しています。また、2025年度には、取手市内全14校の小学3年生を対象に、この対話型鑑賞プログラムを実施する予定です。先日、市内の小中学校の校長先生方にお集まりいただき、本プログラムをご体験いただいたのですが、最初はやや緊張した面持ちでいらっしゃった校長先生方が、コミュニケーションを重ねるうちに、次第に楽しそうにお話をされているご様子が大変印象的でした。

後藤：アトレ竹芝では、特に竹芝エリアをマネジメントする組織の皆様と緊密に連携させていただきながら、エリア全体の活性化に努めています。主に近隣企業や、島の観光協会の皆様も含め、定期的に伊豆・小笠原諸島の振興について協議を重ねています。私どもが企画した「島を味わうfood fest」も、結果として相互送客につながり、エリア全体として島を盛り上げていきたいという皆様の想いは共通であるため、一丸となって事業を推進できる環境が整っていると感じています。この取り組みによって、周囲の方々の意識も少しずつ変化していると感じていますが、皆様の店ではいかがでしょうか。

福岡：「いばらきK1ライド」は、立ち上げから運営へとフェーズが移行し、そして現在はさらに新しいステージへと進んでいく過渡期にあると認識しています。昨年から新たに参画したメンバーは、私自身もそうでしたが、当初は戸惑うことも多かったと推察しています。それが、具体的な事象を俯瞰で捉え、思考を深めることで、より本質的な理解へとつながり、納得感が醸成されていったのではないかと考えます。メンバー全員が真剣にこの取り組みに向き合っており、プレイアトレ土浦の文化が着実に引き継がれ、その熱量の高さには目を見張るものがあります。

澤村：大変お恥ずかしい話ではありますが、以前の勤務地にいた頃は、VIVAの取り組みについての認識が十分ではありませんでした。それゆえ、現在の部署ではメンバーと日常的に対話を重ね、積極的に情報を発信したり、社内掲示板に掲載したりするなど、VIVAの取り組みを少しでも多くの皆様に知っていただけるよう、意識して活動しています。何かしらの反応をいただけた際には、社員だけでなくVIVAスタッフのモチベーション向上にもつながっています。小暮さんもお話されていましたが、共感は非常に大切なことであり、それによって多くの人々の心が動いていくのだと実感しているところです。

THEME 02

「サステナビリティ」と「事業成長」の両立に向けて

社会的価値と経済的価値の両立という、アトレが挑むべき経営テーマ

社長：サステナビリティの推進と事業の成長を両立させることは、我々にとって極めて重要な経営課題です。社会的価値の創出と経済的価値の追求という、時に両立が難しいとされるこの課題を、皆様はどのように捉え、乗り越えようとされているのか、そのヒントとなるご意見を伺えればと思います。

福岡：茨城県および土浦市の観光戦略における重要な柱の一つがサイクリング関連事業ですが、マネタイズの面では長らく試行錯誤を続けており、「いばらきK1ライド」もこれまではアトレが販促費用を負担する形で主催してまいりました。しかしながら、初年度約200名規模であった参加者数が、3回目となる2024年には900名規模にまで成長しました。運営面などでの効率化は引き続き必要ですが、あと数百名参加者を増加させることができれば、行政主体の事業として自走できる段階に達しつつあると手応えを感じています。実際に、約900名の参加者のうち8割以上が県外からのご参加で、さらにそのうち4割以上が宿泊を伴う来街であったというデータも得られており、このイベント開催による地域への経済効果は着実に表れはじめていると認識しています。

澤村：VIVAに関しては、主に社会的価値の側面を拡充させる形で取り組んできましたが、今後はそこにショップの皆様をより積極的に巻き込んでいくことで、経済的価値とのバランスを追求していきたいと考えています。先日、ショップ向けの運営方針説明会においてVIVAの活動を改めてお伝えしたところ、あるショップより、ぜひ一緒に取り組みに参加したいとのお申し出をいただきました。ショップの皆様を積極的に巻き込んでいくことで、経済的価値のバランスも取れるよう、具体的なアクションを開始したところです。

小暮：アトレ恵比寿の取り組みは、新しい価値を生み出していく活動であると捉えています。今回、多くの方々からの共感を得て、新たな価値を創造することができました。真っ先に共感を得たのは、まずはショップの皆様からでした。この取り組みをきっかけに、ショップの方々から「実は自店でもこのようなサステナブルな取り組みを行っているので、アトレの共有スペースでそういった情報を発信するイベントを実施したい」といったお声をいただくようになりました。また、将来的には、サステナビリティに力を入れていらっしゃるショップが、「このような先進的な取り組みを行っているアトレであれば出店したい」とおっしゃってくださる可能性もあると考えています。

THEME 03

持続可能な未来のために新たな価値創造へ

アワード受賞を契機とした、アトレのさらなる飛躍と未来への展望

社長：最後に、皆様が今回の受賞を糧とし、今後どのような未来を描き、どのような活動に挑戦していきたいとお考えか、その展望をお聞かせください。

福岡：この度は、グランプリという大変名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。しかしながら、私どもは「いばらきK1ライド」のみならず、首都圏の駅に複数立地するアトレの拠点性やつながりを活かした街づくり全般に取り組んでいます。徐々に地域の皆様に認知され、応援していただける体制が整いつつありますが、まだ属人的な側面に頼る部分も否めません。今後は、よりシステマチックな運営体制へと転換し、誰が担当しても継続的に活動を推進できるような組織づくりを進めていく必要があると考えています。

小暮：現在、化粧品の廃棄も非常に大きな社会問題として認識されています。その廃棄化粧品を回収し、絵の具の画材として再生させ、アート活動を展開されている企業様が、私どもの取り組みに共感してくださり、先日、化粧品と循環というテーマで共同イベントを実施しました。このように、共感を生む取り組みをきっかけとして、それに紐づいた新しい活動が増えていると実感しています。そもそも、こうしたサステナビリティへの取り組みがなければ、新しい方々との出会いは生まれなかったことを考えると、アトレ恵比寿に限らず、どの店においても、積極的にチャレンジできる土壌はあると思っています。例えば、CO^2やゴミを削減するような取り組みは数多くありますが、そこにアトレならではの視点や工夫、すなわち「アトレフィルター」をかけることで、アトレの手にかかると非常に洗練された、魅力的なものに昇華させていけるような未来を目指したいと考えています。

後藤：アトレの企業理念である「お客様と地域の皆様に新しい価値を…いつまでも、しなやかに」という言葉は、今回の取り組みにおいてもそうなのですが、強く意識し続けることではじめて形になっていくものだと感じています。アトレが立地するそれぞれの街には、その地域ならではの魅力が必ず存在しているはずです。そういった地域固有の価値を、地域と連携しながら、時にはアトレが主体となって巻き込んでいくことで、新しい価値を創造し、地域社会と共に成長していければと願っています。

アトレの明日を拓くために

結びに ── 共感の輪を広げ、ステークホルダーと共に築く、アトレのサステナブルな未来

社長：皆様の熱意あふれるお話から、アトレのサステナビリティ活動が、各々の地域特性を深く理解し、そこに暮らす人々と真摯に向き合うことから生まれていることを改めて強く感じました。「100の街があれば、100の顔のアトレ」という私たちのミッションは、まさに皆様のような現場の知恵と情熱によって体現されています。

今回の受賞は、個々の活動の成果であると同時に、アトレ全体でサステナビリティに取り組む上での大きな推進力となるものです。皆様の取り組みから得られた貴重な知見や成功要因を共有し、全社的な活動へと昇華させていくことが、これからのアトレにとって不可欠となります。

私たちは、お客様、地域の皆様、お取引先様、そして社員一人ひとりの「共感」を原動力とし、それぞれの地域社会が抱える課題解決に貢献するとともに、地球環境との調和を目指していく必要があります。アトレは、これからも「きらめく街、ときめく暮らしの、はじまりに。」という価値を提供し続けるために、ステークホルダーの皆様との対話を重ね、しなやかに変化を捉え、持続可能な社会の実現に向けた挑戦を続けていくことを、ここに改めてお約束したいと思います。